

梅園学会

ニユース

2012.7

No. 156

第37回梅園学会について

10月27日(土)28日(日)

今年も秋の大会の準備をすまひ時期となりました。今年も大会も十月末の土日、梅園の里を会場として開催することを御許しいただき、ご了承を頂戴いたします。

今年の大会の主題を何に設定するか、大会事務局としては東京例会で議論をすませた梅園の「養生訓」が一つの有力な候補にまよと考へます。問題提起を兼ねてある問題と今回のテーマとをとりあけてみたいと思ひます(後述)。

主題はまだ未定ですので、学会報

への投稿、大会の研究発表の募集を八月末締切りで致し、併せて主題についても案があらまじら事務局までお寄せ下さい。

〈大会発表の募集〉

発表テーマとその簡単な概要を八月末までに事務局まで寄せ下さい。学会報第37号原稿募集

十月末の大会まで発行する学会報への投稿原稿を同じく八月末までにフロッピーの形でお寄せ下さい。

投稿されたものは必ずしもそのまゝ採用されることは限りません。外洋に送付する場合は千円以下は行ないます。また第三十七号の特集が未定ですが、各会員の方の積極的な投稿を期待します。

なお今年の大会も初日午前中は梅園の道ウォークが予定されています。

可 佃原の中からも後半に歌舞妓、浄瑠璃などの批判がでてきます。しかし「奇技淫巧」を否定しただけでなく、「奇技淫巧」という規定やその出自を踏まえた上で、十八世紀の梅園の指摘に向き合(尚書)「泰誓下」に登場する「殷の最後の帝王紂が「奇技淫巧を作して以て婦人を悦ばす」という形で、婦人とは「姫」であったことが史記殷本紀の紂のところでわかります。史記の記述では賦税を厚くし、遊みのための無用な鹿台や花台の増築、酒池肉林の乱痴氣騒ぎに浪費した。

「養生訓」の「遊民」批判の中に「奇技淫巧」が見据えられているように、「世の人此の理へて思ひを知らず己世を安ん煙さんにて、淫巧奇技を

者を養ひ、人の囊中の物を釣り出す。こに於て釣る者と釣らるる者と同一く民の膏血を貪り養ふ。」(同上) 梅園の時代は十八世紀、化弊救弊の登壇で、物質は都会に集中する、すなわち金次第という世の中になり、貨幣が流通の手段から蓄財・富の源泉となり、金利生活者が登場する。形は変えずに高利(商人)の心が政者の心だり心なく、都会に住む者たちの心を「おめえい」。そのような心と生活方をすむ者も梅園は遊民(遊手)と規定した。農民の数は減っていく。 佃原で活字を「活字現」を描いていふが如く鋭い。 こんまでくると梅園の奇技淫巧は江戸の元祿以降に始まる都市文化、都会文化の本質のようと思ひます。物が高品となり、所有欲があらわれ欲望も開き、おもしろ文化化していく。 佃原の中千の利休が批判するもの

本報がそれと学会行事として加したと思ひます。ウォークは初日午後三時頃までかきとすれば、研究発表はそれ以後といたします。 また関東地方の若し人々(高橋正まさの)の理科研究発表も具体化されれば歓迎したいと思います。 事務局まで八月末(九月初)までに申し出て下さい。今年は一晩か難しければ、学会の会場の発表を埋めたいと思ひます。

養生訓で梅園が否定した「奇技淫巧」とは何か

「佃原の茶能、歌舞妓、浄瑠璃批判とも併せて―― 三浦梅園の「養生訓」の中で唯一の現代人がすくまなく認めてくれない指摘が「無益無用の物」が「人の目を悦ばしめ、心をこらめ、奇技淫巧」として「遊化の害」として否定されていることだ。

うなコンテクトの中せした。

「中に太閤秀吉の比、堺千利休、其
誉れあり。古器の価など定めに、後
には私慾出で来りて、己と親疏好悪
により、新しきをも旧しとし、價をも直
となし、心のまにふるまひしかば、太閤怒
らせ給ひからめてこれを誅せられぬ。其
道にとりては、奇代の人と稱すれども、
名教中よりこれを解れば、大に間然
す。き人なり。」(日 榎原忠) 注名教は儒
教の意か? 間然は気配がある意。

「茶も、能も、歌舞伎も、奇技淫巧
の成せしものにとらえたやうだ。

「ナリとも人情の赴く所、やむべしに
はあらざれども、人の上一人より下億兆
に至るまで、天を敬し、天にまゆることを



← 新谷正道氏近影

梅園学会ニュース 原稿

新谷正道

突然、投稿の依頼を受けました。私は一
応、安藤昌益研究というボジションから参
加していますが、すでに十五年くらい前、
始めて参加した大会の場所が安岐町の漁協
会館?とかいう場所、そのときローズマ
リ・マーサ先生も来日して講演され、大変
盛況だったことを懐かしく思い出します。
当時と比べ、いまは随分勢いが落ちていて、
いつも決まった顔ぶれの発表者しかいませ
ん。梅園に関心をもっている人に来るだ
け声をかけ、その日ごろの成果を出し合っ
ていただく大会にできないものでしょうか。

私も前号で投稿されていた浜田さんと
ほぼ同世代です。安藤昌益の方は、梅園よ
りはるかに長い研究歴をもっており、昭和
五二年、都立高校に就職が決まって上京す
る以前から始めておりました。上京早々、
寺尾五郎氏を講師とする高田馬場の寺小屋
(自主講座運動)の安藤昌益の会に参加し、
会員もかなりいて、紀伊国屋ホールで聴衆
数百人規模の講演会をもったこともありま
す。その延長上に寺尾十五人のメンバーで
『安藤昌益全集』十八冊の刊行作業があり、

忘る(から)ず...」と述べています。

「このような娯楽や芸術・文化が生まれ
くたかそかに赴(おもむ)くことはやむ
をえないと梅園は一心みとめますが、
各々の職分(四民としての勤め)は忘
れてはならない、住々の徳(はたらき)
をもつ天の営みを助け、各々(ひとり
ひとり)を忘るはならないことを強調します。

「奇技淫巧は博覧(びやく)であるというの
梅園の根本主張でしょう。梅園は
ずばり次のように言います。

「今の人の弄(あそ)び、半は無益にして、有
益を害す。天地生々の徳に悖る
事なり。」(日 榎原忠)

「養生訓」や「榎原」の中に見え
る「奇技淫巧」は娯楽、批判を
する三浦梅園が今日の日本の消
費税率の引き上げ税の一体化論議を
見たら、どう思われるでしょうか。熱かい
このことに触れたと思います。

寺尾氏没後は陣容を立て直して『安藤昌益
全集 増補篇』三巻と電子版全文テキスト
を刊行する作業に参加することができまし
た。私のこのような活動はすべて、在野な
がら単独で『季刊昌益研究』(『安藤昌益全
集』刊行終了後は『安藤昌益研究』として
再刊)の編集・刊行を続けて来られた千葉
県勝浦市在住、泉博幸氏のネットワークに
支えられてのもので、泉さんは現在農文
協の編集者で、本会の会員でもあります。

昌益と梅園はしばしば類比されますが、
実際に梅園の著作を読んでいて、そこを昌
益ならどう言っているかと思慮させられる
ことも多いのですが、それで両者の思想的
特質が一層明らかになるというような比較
の議論は柳沢南さんのもの以外、あまりお
目にかかった記憶がありません。昌益から
梅園を、梅園から昌益を説明することは、
私にとっても大きな課題だと思っています。

私と東京例会とのかかわりは、『梅園学
会報』が入手できるというので駒場の小川
研究室を訪れたとき、ちょうど例会当日だ
ったのに参加者があまりいなくて、すぐ帰
るのは気が引けるような状態でした。三浦
貫さんら旧制国東中学出身の年配者パワ
ーによってやっとな例会が維持できた時期もあ

(商人)

為政者は商賈の心を捨て、
儉勤廉恥の風を興し、礼樂(れいらく)礼
讓(れいじやう)の制度を作る(し)!!

梅園はこのように叫ぶでしょう。
日本の国家財政は収入の半が外国債
の返済に毎年費せられていませぬ。
今の年金制度を将来にわたって支
え、財源はないといわれます。東日本
大震災と原発事故が起き、その対
応に莫大な金が必要とされます。当座消
費税率の引き上げはやむを得ないと
考えますか(文責、小川晴久)しかし

今の日本の政府や大政党から、国
民のライフスタイルを変えよ(べき)だ
という提言が全くないのは(未だ)のび
びとしいのは、致命的な欠陥です。
直の豊かさとは何かを真剣に議論
し、GDPを引き下げ、いく生き方を
提示する。梅園の『養生訓』や『榎原』
はそのことを示していると考えます。

(文責 小川晴久)

りました。私も結果的に十七年間、例会に
は皆勤に近いかたちで参加していますが、
いままでいつも片手間の参加でしかなか
ったので、本格的な梅園の学習をと思直し、
『玄論』『元熙論』から『垂輪子』『玄語』
へと至る道を歩み始めているところです。
今年にはひとまず『養生訓』『榎原』の現代語
訳改訂版を完成させたいと思っています。

安藤昌益研究の方は、足立区の千住での
郷土史研究会の協力者として、稿本『自然
真宮道』百一巻が幕末に千住の薬屋橋本家
に搬入された経緯を調べる活動が続いてお
り、橋本家敷地内(医院)にいた医師橋本
玄益と頻りに交流していた幕府医学館講師
佐藤元長の日記解読を進めています。玄益
は多紀元望の医塾存誠薬室の門人で、佐藤
元甚も漢方医ながら牛痘をいち早く実施し
ており、青年期の森鴎外や妹小金井喜美子
の漢詩漢学の師でもあって、「医心方」の校
刻事業に加わっていた人物です。橋本家と
は眼鼻の距離に京都帝国大学に国史学講座
を創設した内田銀蔵の実家があり、その当
時の京都帝国大学文科長が狩野亨吉で
した。その京大内田文庫から幕末期の安藤
昌益関係資料が出て来ているので、その解
明作業にも取り組んでいるところでは